

博士学位論文審査要旨

2015年12月16日

論文題目： 指示語「コ」「ソ」の文章論的研究—小説における機能を中心に—

学位申請者： 張 子如

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 藤井 俊博

副 査： 文学研究科 教授 石井 久雄

副 査： 日本語・日本文化教育センター 准教授 李 長波

要 旨：

本論文は、指示語「コ」「ソ」について、これまで取り上げられることが少なかった文章論的見地から、小説テキストでの機能や特徴を実証的に明らかにしようとした意欲的な論文である。

第一章・第二章では、中心的課題とする文脈展開機能について理論的な考察を試みた。この機能について佐久間まゆみの考察もあるが、自らの定義とともに、持ち込み内容の範囲、指示語と持ち込み内容との距離、持ち込み内容の変容、指示語の後続語句の四点をあげ中心課題を明確にした。第二章では、この定義に基づき文脈指示、現場指示、観念指示、絶対指示の四用法がいずれも小説の文脈展開に関与することを明らかにするとともに、指示代名詞、指示連体詞、指示副詞の各用法と第一章で示した四点の課題との関わりを明らかにした。

第三章では、指示代名詞「コレ」「ソレ」について、「ソレ」は語句や節・文などのレベルで表わされる「物体」「行為・心情」を持ち込み、「ソレ」は文や連文レベルで表わされる「事態・様相」などを持ち込むことを明らかにした。また、従来分析が少なかった視点の問題に関わり「コレ」が心理的空間的に近い事物を持ち込み「ソレ」が中立的に捉えた事物を持ち込みやすいことを明らかにした。特に会話文の「コレ」の現場指示用法は、対象物が明示されないことが多いなど、小説に特有の特徴を指摘した点は指示語のテキスト研究の方面から興味深い成果である。

第四章では、指示連体詞「コノ」「ソノ」の後続名詞との関わりから、具体的な事物が続くこともある「ソノ」に対し、「コノ」が先行文脈をまとめる「ラベル貼り」に用いられ、「コノ」は転換度が高い「カテゴリーの変換」の場合で用いられやすいなどの特徴を明らかにした点も、「コノ」の指示用法についての新たな知見として評価される。

第五章では、指示副詞「コウ」「ソウ」の後ろに「た。」や「て」が続く場合を取り上げ、後続文脈との関わりを考察した。「ソウ」は単純に文脈を受けるのみでまとめる力が弱い、「コウ」は強制的で文脈をまとめ、文章の切れ目に用いられやすいという機能上の特徴を明確化した。

文脈展開機能において、文脈をまとめたり切ったりすることがどのようにして発生するのか、その原理的な説明にはなお考察の余地を残しているが、実証的な調査によって、これまで気づかれなかった、「コ」「ソ」の文脈展開機能のいくつかを実証的に指摘している。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2015年12月16日

論文題目： 指示語「コ」「ソ」の文章論的研究—小説における機能を中心に—

学位申請者： 張 子如

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 藤井 俊博

副 査： 文学研究科 教授 石井 久雄

副 査： 日本語・日本文化教育センター 准教授 李 長波

要 旨：

上記審査委員3名は、2015年12月16日、午後2時から約2時間にわたり、徳照館2階の第2共同利用室において、公開で学位申請者に対して口頭試問を行った。

学位申請者は、審査員からの質疑応答に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の事柄に関しても、的確かつ詳細な応答を行った。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、語学（英語および日本語）についても、十分な理解力と運用能力、および表現力があることが認められた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 指示語「コ」「ソ」の文章論的研究—小説における機能を中心に—

氏名： 張子如

要旨：

指示語は談話・文章において多く用いられ、非常に重要な役割を果たしている。これまでに、指示語の分類や指示範囲に関する研究は数多く行われたが、指示語の文章論的研究は遅れている。指示語の文章展開における基本的な役割については、明らかにされておらず、指示語の文章論的機能の系統的・総合的な研究は、いまだ未開拓の領域である。本研究では、この課題をめぐって、先行研究を踏まえつつ、指示語の文脈展開機能の基本的な役割を明確にした上で、小説テキストを対象に、具体的な調査を行い、データを通して系統的に指示語の文章論的機能を明らかにしようとした。また、小説ジャンル特有の語り手の視点や会話文と地の文の叙述との関わりからも指示語を考察した。

本研究では、主に前後の文脈と深く関わる文脈指示用法の指示語「コ」と「ソ」を研究対象とする。具体的にいえば、地の文における文脈指示用法の指示代名詞「コレ」「ソレ」、指示連体詞「コノ」「ソノ」、指示副詞「コウ」「ソウ」を研究対象とする。また、会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」は小説の基盤である地の文の叙述と緊密な関わりを持ち、小説テキストにおける指示語の特徴的な用法であると考えられるため、本研究ではこれも研究対象とする。

本研究では、現代語の日本語小説における指示語の文章論的機能を中心に、具体的に次のような内容を考察した。

まず、第一章では、指示語の文脈展開機能を明らかにする前提として、指示語の文脈展開機能の定義およびそれを踏まえた研究の着眼点を提示した。文脈展開機能とは、先行部分または後続部分から必要な内容を、指示語を含む文・句に持ち込み、指示語の持ち込み内容を新たな成分の中でとらえ直すことによって、新しい文脈を完成させる機能である。これに基づき、指示語の文脈展開機能にかかわる四つの着眼点を提示した。すなわち、持ち込み内容の範囲、指示語とその持ち込み内容との距離、持ち込み内容の変容、指示語の後続語句である。この四つの側面によって、指示語の文脈展開力の強さを考察することができる。これら四つの側面の前提となる持ち込み内容の分析は、文脈展開機能を考察する中心的な課題といえる。また、「コノ」「ソノ」「コウ」「ソウ」においては、後続語句を加えた分析が必要となることを述べた。

第二章では、文章という言語文脈依存のテキストにおいて、指示語の文脈指示、現場指示、観念指示、絶対指示という四種類の指示用法がいかに関与しているかを考察した。小説において、文脈指示は直接先行詞と照応関係を成し、必要な情報を持ち込み、文脈展開機能を果たす。一方、現場指示、観念指示と絶対指示は文脈に直接持ち込み内容が存在する場合もあれば、存在しない場合もある。直接持ち込み内容が存在しない場合に、前後の文脈の提示から背景知識が導入され、必要な情報が持ち込まれる場合がほとんどであることを明らかにした。つまり、四用法は原則としてすべて文脈展開に関与していることを確認した。

次に、個々の指示語が小説テキストにおいてどのような文章論的機能を持ち、どのように運用されるのかを解明するために、指示代名詞「コレ」「ソレ」、指示連体詞「コノ」「ソノ」、指示副詞「コウ」「ソウ」をそれぞれ具体的に検討した。代名詞である「コレ」「ソレ」については、持ち込み内容のカテゴリーや長さの点から考察した。それに対して、連体詞である「コノ」「ソノ」については、後続の名詞類（後続語句）が極めて重要であるため、その後続名詞類のカテゴリーを考察した。副詞「コウ」「ソウ」は修飾する動詞の性質によって用法が異なるため、特に多く見られる発話・思考動詞を修飾し発話・思考の内容を表す場合を取り上げた。具体的な内容は次

のようである。

第三章第一節では、「コレ」「ソレ」について、持ち込み内容の点から両者の違いを考察した。持ち込み内容を「人物」「物体」「行為・心情」「事態・様相」「発話等の内容」「その他」の六種類のカテゴリーに分けた上で、各カテゴリーにおいて持ち込み内容の長さを語句、節、文、連文の四種類の言語単位に分けて検討した。「ソレ」の持ち込み内容は、語句や節、文レベルの言語単位で表されることの多い「物体」「行為・心情」などの内容で、具体的なものを持ち込みやすい。それに対して、「コレ」の持ち込み内容は、文や連文レベルのような比較的長い言語単位で表されることが多く、「事態・様相」「発話等の内容」のような比較的抽象的な内容となりやすい。このように、「コレ」と「ソレ」との間に、持ち込み内容とその長さにおいて使用傾向の差異が見出された。

第三章第二節・第三節では、小説ジャンル特有の語り手の視点と指示語の使用との関わり、また地の文の叙述と会話文における現場指示の叙述との関わりについて考察した。まず、第二節では、「芋粥」において、語り手の視点に基づいて、指示語「コレ」「ソレ」がいかに関わっているかを考察した。「コレ」は「人物」の内容を持ち込みやすく、語り手の認識の範囲内の事物または心理的・空間的に近い事物を、現場的・具体的に捉える場合に用いられる。それに対して、「ソレ」は「物体」「事態・様相」の内容を持ち込みやすく、語り手が表現対象と心理的・空間的に距離を保ち、中立的・概括的に捉える場合に用いられるということを明らかにした。次に、第三節では、会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」の対象物が前後の地の文にいかに関与しているかを考察した。会話の叙述は地の文中に設定され、登場人物の視点から捉える現場指示の「コレ」「ソレ」の対象物は地の文中に表現される。そのため、「コレ」「ソレ」は地の文の叙述と深く関わっていると見える。会話文中の現場指示に多く見られる「コレ」の指示の対象物は前後の文脈に表現されない例も少数見られるのに対し、「ソレ」は主として先行の地の文に指示の対象物が明確に提示されるのが原則的であることを明らかにした。

第四章では、「コノ」「ソノ」を取り上げ、後続名詞類を「人物」「物体」「人間行動」「事態・様相」「時間」「場所」「抽象的名詞」の七種類のカテゴリーに分類し、代行指示と指定指示の用法について検討した。第一節では、代行指示において、後続名詞類が「時間」「場所」「抽象的名詞」である場合に、「コノ」「ソノ」はいずれも、先行文脈の広い範囲の内容を承けて後続文脈に続ける表現が多く、「その時」「この場合」のような表現で接続語に近い用法が見られた。ただし、「ソノ」は後続名詞類に、「人物」「物体」「事態・様相」のような具体的な内容の名詞をとる場合もあるのに対して、「コノ」はそのような具体的な内容の後続名詞類をとることはなく、後続名詞類と合わさってもっぱら接続語のような表現を作る点に違いが見られた。第二節では、指定指示の場合の「コノ」「ソノ」を取り上げた。指定指示は反復と言い換えの二用法に分けられるが、先行研究が指摘するように、「コノ」が先行詞の言い換えに用いられやすいことを本研究でも確認した。さらに、言い換えに用いられないとされた「ソノ」も言い換えに用いられることを明らかにした。「コノ」「ソノ」はともに先行文脈をまとめるような「ラベル貼りの言い換え」（事の顛末の詳しく長い内容を「この事件」で言い換えたような場合）に用いられやすいという共通点が見られる。一方、反復に近い「類義型の言い換え」の場合（「苦しさ」を「その苦」で言い換えたような場合）に「ソノ」のみが用いられ、「ソノ」は「カテゴリーの転換」（「証言」を「この刃」で言い換えたような場合）のような転換度の強い言い換えに用いられにくいと考えられた。

第五章第一節・第二節では、発話・思考動詞が後続する場合の「コウ」「ソウ」を対象として、「た。」形で文が終止する場合と「て」形で文が続く場合を取り上げ、後続内容との関わりを考察した。単純に内容を承ける文法的機能を持つ「ソウ」は先行内容をまとめる機能が弱いので、内容の切れ目に用いられることが少ない。それに対して、強調的に指示する機能を持つ「コウ」は文脈にまとまりをつける表現効果を持ち、文脈展開上の切れ目に用いられることが多い。

以上の考察を通じて得られた「コ」と「ソ」の文章論的機能の違いは次のようにまとめられる。

「ソ」は短い内容から長い内容までを広く持ち込み、前後の内容を中立的な立場で連結するものであり、小説の基本的な文脈の流れを支えるものである。「コ」は長い内容を持ち込むことが多く、特定の内容を強調し、目立たせるものであり、ある部分の内容をまとめる機能を強く持つものである。

本研究は、指示語「コ」と「ソ」について、文章論的観点から具体的な知見を示すとともに、系統的な把握を試みたものである。その結果、「コ」と「ソ」の使用傾向が異なることが見出されたが、その背景に働く原理については十分に検討できなかった。「コ」と「ソ」がどのような選択基準で用いられるかについて、今後さらに具体的な表現を個別に検討するとともに、文章論と文法論的観点を合わせた追究が必要である。